猿新聞

編集責任者
山村　準
tel:0595-63-1725
Email
jyun.y@asint.jp
名張鳥獣害問題連絡会

発行部数
【全戸回覧】
錦生地区：　100部
赤目地区：　150部
箕曲地区：　70部
ひなち地区：220部
つつじが丘：430部
【全戸配布】
国津地区：　380部
市民センター：　90部
（9地区）
名張市議会：20部
名張市役所：20部

拡大造林の二の舞か？

民間企業に国有林伐採を委ねる

広大造林政策は、終戦直後から始まった政策で、昭和20年～30年代は、日本では戦後の復興のため、木材需要が急増し供給が追いつかず木材不足で木材が高騰を続けていました。このため、政府は拡大造林を急速に推進し、天然林を伐採し、平成2（1990）年頃には500万ヘクタールもの天然林が、全てスギやヒノキを主流とした人工林に様変りしています。

ちなみに、東京都の広さは、およそ21万9千ヘクタールです。

拡大造林とは天然林を全面的に伐採し、スギやヒノキの苗木を植林し人工林を造成することです。この天然林から人工林への大転換は、生態系に大きな影響を与え、森林で生活する動物や植物に大きな影響を及ぼし、中にはその変化に上手く対応出来ず姿を消してしまった種もいます。

その一方、この造林政策によって、劇的に生き方が変わった動物にシカがいます。天然林から人工林への転換期は、スギやヒノキが成長する30年間ほどは、日当たりがよくなり草が繁茂し、シカの生息に最も好ましい環境となります。彼らはその中で保護政策や温暖化という気象条件をも味方にして増殖を続けシカの分布域が人間社会にまでも拡大してきたのです。人工林が成長する中、廉価な外材が輸入されるようになり、木材の輸入自由化とともに日本の林業は衰退しています。拡大造林により植林された森林は今、伐頃を迎えていますが世界有数の森林大国である日本では供給木材の80％を外材が占めるというジレンマが長らく続いています。このため、日本の森林は荒廃しています。中でも人工林の荒廃は目に余るものがあります。長らく放置されている人工林は、過密になり林内は暗く下草も生えず、土壌がむき出しになっていて、生物多様性・生態系・水資源涵養の保全はピンチ状態で、野生鳥獣の棲めない森となっています。

今や、人工林地帯は増え続けるシカなど野生動物を収容できない状態になっています。

これが拡大造林政策が獣害の大きな要因といわれている大まかな由来です。シカを引き合いに出していますが、これは野生鳥獣全てにいえることです。

◇

このように、人間の独善的な行為が大自然の破壊につながり、全国的に獣害が深刻化しているという現実がありながら、国は臆面もなく国有林野管理経営法改正案を提出。

全国の国有林で最長50年間、数百ヘクタールの伐採・販売権を民間業者に委ねる法案です。

「国有林伐採を民間に大きく開放して林業の成長産業化」と謳いますが、国民の共有財産である国有林の樹木伐採権を一部の営利企業に付与するという法案です。皆伐後、再造林のビジョンさえ示されず、驚くことに再植林の義務化さえ「あやふや」な状態で、確立されていません。皆伐後、直ちに再植林されたとしても、樹が生長するまでには樹種にもよりますが、30～40年はかかります。その間、皆伐地は日がよく射す草原となり、シカ牧場のような状態になります。これは拡大造林でも同じことが起こりシカなど野生動物が激増し現代の獣害の深刻化につながっているということを国は検証していないのでしょうか。問題です。さらに問題なのがシカ対策による再植林のコストの上昇があります。シカが多数生息している地域で皆伐・再植林をすると、せっかく植えた苗が食べられて枯れてしまいます。苗木が活着し定着するまでには、想定外のコストが掛かることは必至で、これが民間業者が耐えられるかが大きな問題となります。最後の付けは「血税」に回ってくるような気がするのは私だけでしょうか。

水資源涵養・生物多様性の保全、天然林化や針葉樹と広葉樹との交合林化は必要なことなど、森づくりの問題点が十分に検討されているのでしょうか？。

また、異常気象での豪雨が頻発する時代に皆伐を進めて大丈夫でしょうか？。恩恵をこうむるのは、結果的に参画する大企業とシカくらいで、未だに解決策が見えない戦後の「負の遺産」拡大造林の二の舞なることは目に見えています。

国有林に目を向ける前に、民有林の再生を考える必要があるのではないでしょうか。

国土面積の約7割は森林。そして、その森林の3割が国有林という世界有数の山林国が、今や、国産材の自給率は20％にまで落ち込み日本林業は衰退し、森林は荒廃をしています。

CO_2削減は世界的課題です。森林の適正な管理がこのまま進まないと、森林によるCO_2吸収目標が達成できず、国際公約が守れなくなる恐れも出てきます。

国有林は国に守られ比較的管理が行き届いていますが、一方、多くの民有林では植林以来、間伐など適切な森林整備が行われていない森林が多く、野生動物が生息できない状態にまでなっていて、多くの野生動物は人間界に生息域を拡大してきています。人間の生活圏に入り込んできた野生動物は、農作物を餌とし異常なほど数を増やしています。シカでは、ハンターの減少や暖冬の影響もあり、現在シカの自然増加率は多くの地域で年率20％に達すると考えられています。数年で個体数が倍増する計算です。

獣害を、単なる自然現象ではなく、森林環境の荒廃が大きく関わっているということを認識することが重要です。

近代の「負の遺産」といわれている、拡大造林の結末を思い起こす必要があります。

今、大手木材メーカーや、大規模なバイオマス発電会社が、安い国産材を探し求めています。国有林を伐採しそれに充てようというのが、国有林野管理経営法改正案なのです。

バイオマス発電は石炭火力発電などと比べてCO_2削減になるという話を聞いたことがあると思います。木材も石炭も燃やせばどちらもCO_2を排出するのに、なぜ木材だと削減になるのでしょうか。

これは「カーボンニュートラル」という考え方から生じたもので、植物は燃やすとCO_2を排出しますが、成長過程では光合成により大気中のCO_2を吸収するので、排出と吸収によるCO_2のプラス・マイナスはゼロという「おかしな」概念からです。

これをいうなら、化石燃料にも同じことがいえるのではないでしょうか。

CO_2削減には化石燃料も植物も燃やしてはならないのです。

政府は、国有林野管理経営法改正案を推進するに当たっては、拡大造林政策や、保護政策が、今日の野生動物の生息数や分布域の拡大の原因となり、その結果、農・林業被害の深刻化をもたらすようになったということを強く心にとどめる必要があります。また、国有林は、生きとし生けるものの共有財産であるということを心に留め、イノシシやサルの言い分にも耳を傾けながら、拡大造林の二の舞にならない、森林造りを心がけることが重要です。

チョット一服

「次世代からの警鐘」

平成30年11月25日付けM紙「みんなの広場」で見出しの記事が目に留まりました。投稿者は12歳の小学生です。次世代からの警鐘です！。深く感銘を受けましたので皆さんにご紹介いたします。

「動物と共存する未来がいい」

小学生　睦好　隆宏（東京都江東区）

近年、都市開発などによって、人に害を加える動物が増えたりしています。イノシシは植林によってえさがなくなり、里に下りてきて畑の作物を食い荒らす被害を出しています。シカは戦後、乱獲されて数を減らしましたが、今では天敵のオオカミが絶滅したことで数を増やし、貴重な植物を食べられてりしています。一方で、乱獲によって身近な動物が絶滅危惧種に指定されています。例えば、すし屋さんでよく見るクロマグロは、取り過ぎて数を減らし、絶滅危惧種に指定されました。また、メダカは土手のある用水路に生息していました、外来種のカダヤシの放流などにより絶滅危惧種に指定されています。このことをふまえて、僕は、人も動物も安全に暮らすことのげきるる未来がいいと考えます。そのためには、人が動物とふれあって動物のことをよく知り、動物のことをよく考えて、行動することが大切だと思います。

以上、原文のまま

山を大切にしましょう！

日本の国土の三分の二は森林です。

「国の宝は山也。山の衰えは則ち国の衰えなり。」（江戸時代の林政論）

昔から山は、神の鎮座するところとして人々は畏敬の念を持って接していました。一本の木を伐るにしても神に祈りを捧げ、跡地には必ず代わりの苗木を植えて育ててきました。このように慈しみ育んできた森が、今、見る影もなく荒廃しています。戦後、拡大造林政策により植林された人工林の多くは、手入されずに放置されています。こうした森林では、蔓や枝がからみあい、やせ細った立木が密集したままになっています。林間に日光が入らないため下草も生えず、裸地化が進み少しの雨でも表土が流出してしまうため崖の崩壊など風水害の被害も増えています。また、今、現代人を悩ます「花粉症」の花粉は人の手で植えられた人工林のスギからの飛散が多いといわれています。

健全で豊かな森林には、多様な生物が生息していて、そのバランスを保つために森林は大きな役割を果たして来ました。だが、森林が荒廃した今では、生態系までもが破壊を見るに至っています。これが、今、深刻化を見る獣害の要因だと考えられています。

人工林は、管理を怠れば、あっという間に人に牙をむく存在となってしまうのです。

拡大造林により増加したシカなどが、今、森を食い漁り森林のもつ多面的機能への影響だけでなく、森林そのものの存在が危ぶまれる状況にまでなってきています。平成29年度における、シカやクマなどの野生鳥獣による森林被害面積は全国で約6千ヘクタール。このうち、シカによる枝葉の食害や皮剥被害が全体の約3／4を占め深刻化しています。１９９０年代から生息数が急増し，環境省の調査によると分布域も１９７８（昭和53）年に比べ２００３年には１．７倍に拡がり平成に入ってからシカが爆発的に増えています。このように個体数が増加すると、群れ全体が飢餓状態になり、地表の全ての植物や落ち葉さえも食べ尽くし、森林土壌が流失するなどで、生態系の破壊につながっていきます。また、下層植生の無い森林では、天然更新は困難で、たとえ芽吹いたとしてもシカの餌です。

天然更新を確実にするためにはシカ柵の設置が必要不可欠ですが、今の日本林業の衰退や林家の高齢化を鑑みるときこれは無理な話。この先、森林はどうなっていくのでしょうか。森林がここまで衰退した背景には、人間の活動が関わっていることは、ほぼ間違いないでしょう。森林生態系には、人知を越えた掟があり、その掟に背くと、想定も出来ない事態になるということを、今まさに、シカの異常増殖により思い知らされているところです。

森の中で暮らす多様な生きもの達は、お互いに関わりあいながら、ひとつのまとまった生態系を形づくっています。気候の変化や人間活動により、ある種の数が異常増殖したり減少すると、生態系に乱れが出て、その環境やほかの生き物全体に影響が出るのです。

日本人は古来より、八百万の神を崇拝し、一本の木を切るにしても山の神に祈りを捧げ、畏敬の念を持て山を大切に守ってきました。だが、現代を生きる人間はあまりにも傲慢に成り過ぎているのではないでしょうか。自然の力に畏敬の念と、自然の恵みに感謝する心を養うことが大切なこと考えます。

自然との共生を目指して

はじめに

40年前に大阪よりこの名張に移住してきた。家の前の川では、夏になると子供たちが水遊びをした。ある日子供たちがオオサンショウウオを捕ってきた。慌てて滝の水族館に持って行くよう指示をした、天然記念物だから元の川に戻すようにと言われて家に帰ってきた。家の前に天然記念物がいるのだと驚いたしなんて自然豊かな川なんだと感激もした。また夏休みには子供たちはタモ網でハエやモツなどの魚や、クロカワやヒラタ（カゲロウの幼虫）のさざ虫を捕ってきた。唐揚げや南蛮づけ、佃煮などにして頂いた。自然豊かなところに来たことを喜んだ。大阪にいた私にはとても体験のできなかったことである。梅雨時期の夜には源氏蛍が河原から家の中まで入って来たこともあった。

このきれいな川の水は上流の里山で育まれたのだと云うことをする。豊かな山は良き水を作ることを知ることになった。

人と猿の共存のあり方

猿と人との共存のあり方、数年前のこと田植えを手伝いに大阪から数名の若者が来た時のこと、突然気勢があがった。何事かと思ったら対岸の木に20～30匹の猿がいた。若者たちは、田植えをやめ手をたたいて大喜びをしている。日頃畑を荒らされている私にはその時は理解できなかった。若者たちにとっては動物園でしか見たことのない猿が自然にいることが不思議だったのであろう。人間社会に危害を与えないで猿と人間が住み分けられればこんないいことはない。

猿は1947年に非狩猟獣となりそれ以後有害鳥獣駆除と学術研究目的以外には殺されなくなった。そのため頭数管理がうまくいかなくなった所では1970年頃より畑や集落に出没し農作物に被害をもたらすことになった。名張の被害状況はA群については平成30年度の調査時点では23頭が確認されていて、5年前には43頭が確認されていましたが27年から28年にかけての大量捕獲で半数となりその後も毎年7～10頭の捕獲をしている ことから現在の頭数に落ち着いています。個体数調整の効果もあり被害は若干減少傾向にあります。B群については、発信器の電池切れのため頭数確認ができない状況。本年度早期に発信器の取り付けを実施する予定。

ニホンジカ、イノシシとの共存

ニホンシカ、イノシシとの共生忘年会や新年会シーズンになるといつも知り合いの猟師さんからシシ肉やシカ肉が届いた。シシ肉とこんにやく、ゴボウでボタン鍋がそれとシカ肉の背ロースのお造りが楽しみであった。しかし最近では、なかなか届かない。猟友会員の高齢化が進み捕獲者が少なくなった。捕獲の担い手を育成していくことが今後の課題となっている。対策として名張市では、国庫補助金を活用した大規模防護柵の設置や市独自の補助金による小規模な柵の設置を推進している。

寄稿・田村　修市

サル出没状況

サルの遊動に気象条件が深く関わっていることが知られています。

夏場のサルの採食活動は涼しい朝夕の時間帯に集中して、気温があがる日中は、ほとんどの時間を昼寝に費やしています。サルには私たちのように、汗を出して体温調整する機能が備わっていないので暑い夏は、最低限の体力でお腹を満たし、あとは涼しいところで寝るという、体温を上昇させない生活に徹しているようです。

この時期、サルたちは冬毛から夏毛に毛換えをしますが、生え変わりの遅速や、色艶でその個体の力関係や栄養状態がわかります。

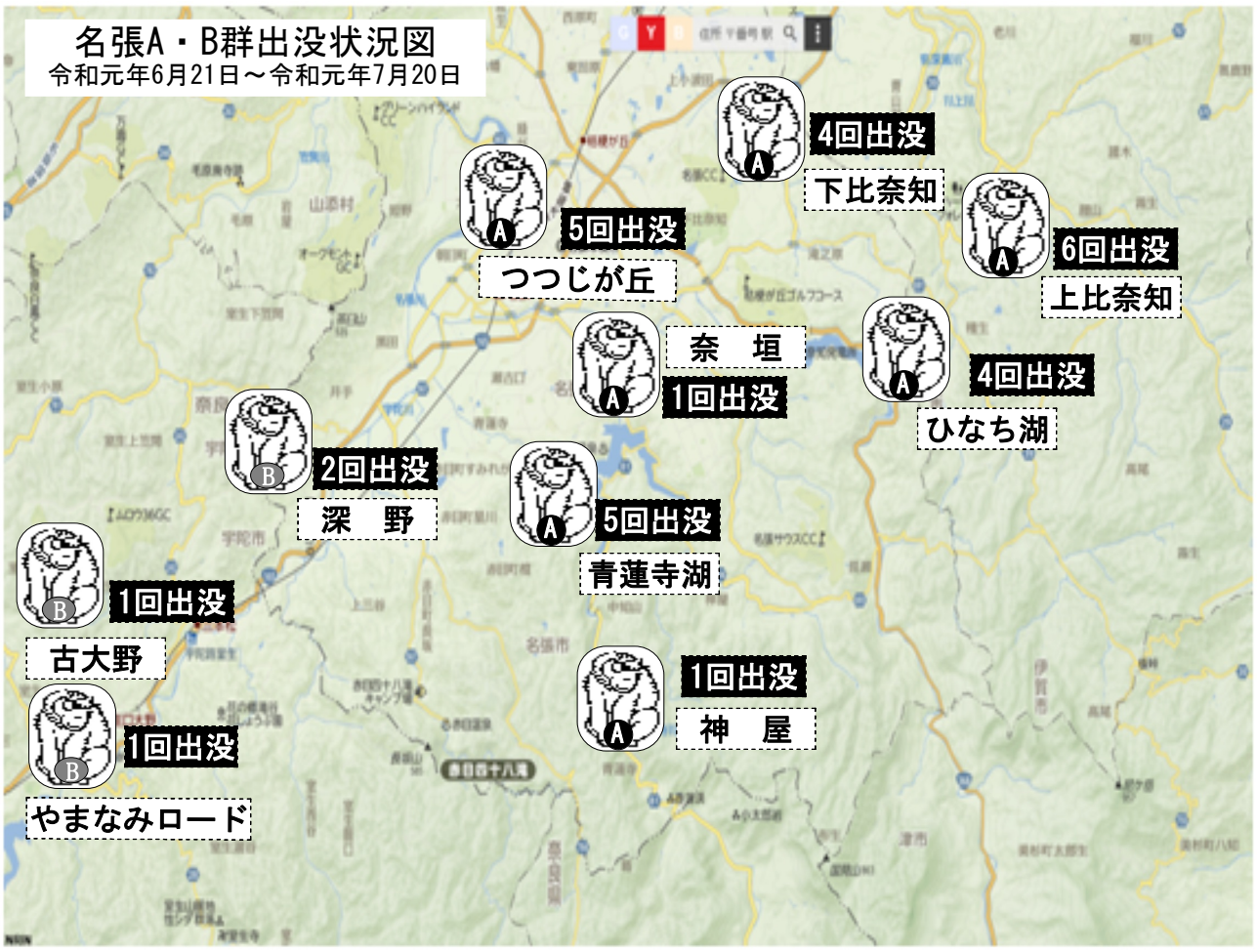
A群は、6月に入り例年通り青蓮寺湖畔の桑の実に集中していたので農作物の食害が比較的に少なかったです。6月3日～6月25日まで青蓮寺湖周辺に滞在していました。

6月26日からは下比奈知・上比奈知に移動。付近の畑を荒らしています。今後は下比奈知・上比奈知周辺とつつじが丘周辺を含め行動するのではないかと思います。また、これからの夏の間はサルは暑さに弱いため昼間は杉や檜林の中でで過ごし朝・夕方に畑に侵入します。この時間帯は注意しましょう。

B群は、発信器の電池切れのため情報確認ができない状況がつずいています。本年度早期に発信器の取り付けを実施する予定と農林資源室はいっています。

情報によると、ここ1年間ほど出没がなかった古大野にも出没があり畑作物に被害が出ています。

B群は神出鬼没です。くれぐれも注意して下さい。



テキストテキ

B群は、ストテキスト

テキスト

テキスト

テキスト

テキストテキストテキストテキストテキストテキストテキストテキストテキストテキストテキストテキストテキストテキストテキストテキストテキストテキストテキスト

テキストテキストテキストテ